

しなの型ミサイル護衛
艦一番艦しなの、彼の
行く末は...

USMC

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022X年、中国による尖閣諸島占領事件から数年後、

新たに新設された護衛隊群、第6護衛隊群第6護衛隊、その艦隊の旗艦である護衛艦「しなの型ミサイル護衛艦一番艦「しなの」」その、しなのが率いる艦隊はアメリカ海軍との合同演習の為太平洋に向かっていった。しかし艦隊は演習に向かう途中、突如国籍不明の潜水艦から攻撃を受けた「しなの」は何も出来ぬまま仲間たちと共に深い海へと沈んでいった。。。。しかし、沈んだ筈の「しなの」は気がつくくと、艦息となり艦これの世界に転生していた。「しなの」は新たな世界で何を成し遂げるのか!!

目次

護衛艦しなの 設定集	1
第1話	11
第2話	25
第3話	33
第4話	49

護衛艦しなの 設定集

しなの型ミサイル護衛艦1番艦しなの

艦籍 日本国防海軍

母港 横須賀国防海軍基地

所属 第6護衛隊群第6護衛艦隊 (旗艦)

〔諸元〕

排水量 54,057 t

乗員 250名(妖精さん)「220名が乗組員、30名が立検隊員」
速力 最大41ノット(75.93 kph)

全長 331 m

最大幅 38 m

機関

I P S方式

ガスタービン発電機 4基

(4基で284000馬力)

可変ピッチ・プロペラ4軸

電源

非常用ディーゼル発電機×3

27式160口径230mm電磁加速単装速射砲用発電機×4

〔武装〕

27式160口径230mm電磁加速単装速射砲×2

27式160口径230mm電磁加速単装速射砲はその名の通り電磁加速砲、いわゆるレールガンである。この27式は2027年国防海軍で正式採用された電磁加速単装速射砲で、毎分約35発の射撃が可能、仰角は -15° / $+88^{\circ}$ 。で、射程距離は対

空、対水上で560km、使用可能弾薬は「230mm対空弾」「230mm高速徹甲弾」「230mm通常弾(榴弾)」「230mm複合弾(HEIAP)」を使用可能、即応弾は

砲塔の真下にある50連マガジン・ドラムが1つの砲に三つあり、即応弾は150発となる、また各ドラムには異なった種類の弾薬を装填可能であり、従って、最大で3種類の弾種を即応準備弾として用意することができる。そして、マガジン・ドラムに装填された弾薬は、CICからの操作で必要な弾種が選択され、砲塔軸上に設置された上部揚弾ホイストによって砲塔内に運弾される。？配置場所？前甲板に2基装備

26式60口径127mm単装速射砲×2

26式60口径127mm単装速射砲は、『しなの』の副砲的存在で、毎分60発の射撃が可能。使用可能弾薬は「127mm対空弾」「127mm通常弾（榴弾）」である、射程は最大31km、主砲本体の大きさは非情にコンパクトで、ステルス性に配慮した角ばった形になっている。

？配置場所？ 両舷に1基ずつ装備

25式艦対艦誘導弾4連装発射筒×3

25式艦対艦誘導弾4連装発射筒は、飛行速度はマツハ0.95（1173.06km）弾頭はHE弾頭であり炸薬量は380kg、射程は250kmである。ミサイ本体はレーダーに発見されにくいステルス性を重視した形状になっている。

誘導方式は慣性航法装置（中途）アクティブ・レーダー誘導（終末）である。（赤外線誘導も可）

? 配置場所? 後部甲板に4連装発射筒を3基装備

SeaRAM 近接防御ミサイル×4

アメリカ合衆国とドイツが共同開発した近接防空ミサイル。「しなの」に搭載されているのはMk. 15 Mod. 31

? 配置場所? ヘリコプター格納庫上に2基、前甲板に2基装備

高性能25mmバルカン砲×4

アメリカの20mmCIWSに日本が改良を加え、砲身を25mmに変えたCIWS。20mmから25mmに変えた理由として、20mmでは射程距離が短く、また威力不足が指摘されたためである ※砲弾が25mmに変更されたため装弾数が20mmの時より微妙に少なくなっている

? 配備場所? Mk 41 VLSと艦橋の間に1基、艦尾に1基、上部構造物両舷に2基
装備

68式3連装短魚雷発射管×2

アメリカ海軍が開発した水上艦装備の魚雷発射管の派生型である？ 配備場所？ 両舷各1基装備

※使用する際はステルスシールドを解放して使用する

22式対魚雷用魚雷4連装発射機×4 (ATT)

22式対魚雷用魚雷4連装発射機は敵潜水艦もしくは敵艦船が発射した魚雷を迎撃するための魚雷で、誘導方式は弾頭部に小型のアクティブソナーを搭載し、そのアクティブソナーで敵潜水艦が発射した魚雷を捜索し迎撃する、またこの魚雷はスーパーキャビテーション現象を利用し、時速230ノットという速さで水中を移動する。

？ 配置場所？ 艦内両舷各2基ずつ装備

※使用する際はステルスシールドを解放して使用する

Mk. 38 25mm機関砲システム×4

アメリカが開発した艦載機関砲システム。主に小型の船舶に対して使用される。

？ 配置場所？ 両舷に各2基ずつ装備

MK41VLS 220セル

アメリカが開発したミサイル発射装置

? 配備場所? 前甲板に100セル、後部甲板に120セル

搭載ミサイル

- ① 26式長距離艦対空誘導弾
- ② 23式中SAM
- ③ 12式巡航ミサイル
- ④ 07式アスロック

① 26式長距離艦対空誘導弾はアメリカ製のSM-2スタンダードミサイルをベースに開発された純国産の艦隊防空ミサイル、誘導方式はアクティブ、セミアクティブの二つのモードがあり、目標近くでは終末アクティブ誘導に切り替わる、また、艦のイルミネーターレーダーの範囲外にいる目標の捕捉及も可能となっている。射程距離は200〜600kmでありまた、本ミサイルは限定的ではあるが、BMD(Ballistic Missile Defence)任務にも対応が可能となっている。

(前甲板VLS60セルに装備、またこのミサイルは1セルに2発装填可能な為合計1

20発装備している。

②23式中SAMは、国防陸軍(元陸上自衛隊)に配備されている03式中SAM改を艦載用に改修した物であり別名(A-SAM)とも呼ばれている。射程距離は50～160km

(前甲板VLS 40セルに装備し、1セルに4発装填可能、合計160発装備している。)

③12式巡航ミサイルは国防陸軍(元陸上自衛隊)が運用する12式地对艦誘導弾を艦載用に改修した物である。

「スタンド・オフ防衛能力の強化」が決定され、12式地对艦誘導弾の超射程化と別に、護衛艦への搭載も検討され、艦載用に開発されたのがこの12式巡航ミサイルである。飛翔速度は、マッハ3(3704.4km)である。射程距離は約2800km。誘導方式は慣性誘導装置(INNS)、光波ホーミング誘導(IIR)、GPSによる誘導となっている。(アクティブ誘導も可能)

また本ミサイルの弾頭は複数あり、「HE弾頭」「二重貫通弾頭」「Tプラス弾頭」がある。「Tプラス弾頭」は

日米合同開発で開発された特殊焼夷弾で、テルミット焼夷薬に燃焼を倍化させる特殊溶液を加えた二液混合式爆薬である。起爆後は直径約3kmの区域が6,000度の熱で焼き払われる。(※Tプラスは「亡国のイージス」に出てくる架空の兵器で元々アメリカ軍が開発したものである)

(後部甲板VLS 90セルに装備)

④07式アスロックは2007年に制式化した対潜水艦攻撃用兵器である。従来のRUM-139 VLAに対し、即応性向上のための飛翔速度の高速化と遠距離探知に対応する長射程化などか目的で開発された対潜ミサイル。

(後部甲板VLS 30セルに装備)

「レーダー」

OPY4多機能レーダー

このレーダーは名前の通り複数の機能を持ったレーダーとなっている。対空レーダー、対水上レーダー、火器管制システム、航海用レーダー等をひとつにまとめた物となっており、レーダーの探知範囲は最大2000km以上、同時対処可能目標数は200以上、同時追尾可能目標は900以上となっている。

「ソナー」

曳航式ソナー×1

パッシブ・アクティブ式の曳航式ソナー

艦首バウソナー×1

艦首搭載のパッシブ・アクティブソナー

「搭載航空機」

小型無人攻撃機 MQ15B

アメリカと共同開発した小型無人攻撃機、とてもコンパクトではあるが、多数の武器を搭載している。また、小型のジェットエンジンを装備している為、飛行速度も速い。本体はステルス性を重視した設計となっている。

「配置場所」後部航空機格納庫に6機格納されている。

全長 6.3 m

全高 2.1 m

固定武装 12.7 mmミニガン×1 (総弾数331発)

その他武装

AGM-114M ヘルファイアIIだけで2発

12式短魚雷だけで4発

97式短魚雷だけで4発

対潜爆弾だけで2発

空対空ミサイル AAM8だけで4発

SH60k対潜哨戒ヘリコプター

「配置場所」後部航空機格納庫に2機格納

第6護衛隊群第6護衛艦隊メンバー

「しなの型ミサイル護衛艦1番しなの」

「改むらさめ型多機能護衛艦6番艦さみだれ」

「改むらさめ型多機能護衛艦8番艦あけぼの」

「もがみ型多機能護衛艦1番艦もがみ」

「たいげい型潜水艦2番艦はくげい」

第1話

202X年

中国軍による尖閣諸島の占領から数年…新たに新設された護衛隊群、

第6護衛隊群第6護衛隊その旗艦である新型護衛艦、「しなの」型ミサイル護衛艦一番艦しなの「しなの」は現在、アメリカ海軍との合同演習の為艦隊を率いて演習海域である太平洋に向かっていた…

しなの艦長

「ふむ…もうすぐ演習海域だな」

しなの副長

「ええ、間もなく到着です」

艦橋で話している艦長と副長、その上でも誰かが話していた…

しなの

「ふあ〜やつと到着かよ…」

「しなの」上部構造物の上にはこの艦の艦魂である「しなの」と「しなの」の護衛艦の艦

魂である「さみだれ」「もがみ」「じんげい」「あけぼの」の五名が居た…

さみだれ

「長かったですね〜」

もがみ

「この後はどうするんだっけ？」

しなの

「ん〜つと、確か最初はアメリカさんと対潜演習だったかなあ」

はくげい

「私達の得意分野ですね」

しなの

「そうそう〜」

あけぼの

「得意分野だからって、気を抜いたらダメよ」

しなの

「分かっているっての〜」

あけぼの

「全く本当かしら…」

その時だった：「しなの」CICから罵声に近い声で無線が来た：：
攻撃指揮官

『CICより艦橋！』

副長

「こちら艦橋、どうした？」

攻撃指揮官

『ソナーに感！方位0—2—0！IFF敵味方識別信号にも応答ありません！』

艦長

「音響解析は？」

攻撃指揮官

『現在確認中です』

副長

「アメリカの潜水艦なのでは？」

艦長

「うむ：：その可能性も無くはないが：：」

艦長

「取りあえず、横須賀基地に連絡しろ」

副長

「了解しました」

しなのCIC

ソナー員

「ん？この音…っ！」

ソナー員

「ソナー音源探知！UNKNOWN、魚雷発射管注水音！」

攻撃指揮官

「何！」

しなの上部構造物

しなの

「何か下が騒がしいな…」

さみだれ

「何かあったんですかね？」

しなの

「何か嫌な予感がする…。お前らは今すぐ自分の艦に戻れ」

あけぼの

「嫌な予感って？」

しなの

「何か…。起きてはならない事が起こる、そんな感じだ…。」

しなの艦橋

攻撃指揮官

『CICより艦橋！UNKNOWN、魚雷発射管注水音！』

艦長

「何だと?!」

群司令

「何事だ!」

その時艦橋には仮眠を取っていた第6護衛隊群司令が来ていた…

艦長

「あ、群司令、現在、所属不明の潜水艦を発見、また所属不明艦は魚雷発射管に注水しているとのこと…。」

群司令

「何だと… 早く全員配置につけろ」

ソナー員

『所属不明艦、魚雷発射管開口音！』

艦長

「っ！」

艦長

『しなの艦長より全艦に達する！対潜戦闘用意！』

攻撃指揮官

「対潜戦闘用意よし！」

艦長

「副長、艦橋での指揮を頼む、俺はCICに向かう」

副長

「了解！」

CIC

艦長

「敵の潜水艦の動きはどうだ？」

ソナー員

『今だ動きは……っ!!所属不明潜水艦、魚雷発射！右舷から6本！二本が本艦に残り四本は各艦に一本づつ！』

艦長

「くっ！対潜戦闘！右舷22式ATT一番二番発射！」

対潜戦闘担当士官

「了解、右舷22式ATT一番二番発射よ！撃て！」

しなの右舷から22式ATTが二発発射され、敵潜水艦が発射した魚雷に向かう

ソナー員

「本艦ATT目標到達まで……5 4 3 2 1 ……目標の破壊を確認！」

艦長

「よし！よくやった！」

攻撃指揮官

「他の護衛艦も魚雷の回避に成功したとのことですよ」

艦長

「うむ、さてどうするか…」

上部構造物

しなの

「おいおいおい、これは… ヤバイぞ！」

C I C

ソナー員

「ん？この音は…」

ソナー員

「敵潜水艦、対艦ミサイル発射、数は6！これは… あげぼの、もがみ、さみだれに對しての攻撃です！」

艦長

「くっ！」

追尾担当士官

「敵対艦ミサイル（あけぼの）（もがみ）（さみだれに接近！3艦とも短SAM発射……
！全弾外れた……！」

追尾担当士官

「3艦とも主砲、CIWSで迎撃中……っ！」

追尾担当士官

「（あけぼの）（もがみ）（さみだれ）……レーダーから……LOST……」

艦長

「な……3隻が撃沈された……だと……」

上部構造物

しなの

「おいおいおい……ウソだろ……あけぼの……もがみ……さみだれ……ウソだ……そんな……あいつらが……」

しなのの目の前には、対艦ミサイルの直撃を受けて真つ二つに船体が割れ、真つ赤な炎をまとった「あけぼの」と「もがみ」「さみだれ」がいた……

しなのCIC

ソナー員

「(はくげい) 敵潜に近づきます」

潜水艦はくげいCIC

はくげい艦長

「何としてでも敵潜水艦の攻撃を止めさせるぞ！」

はくげい艦長

「魚雷戦用意！」

はくげい攻撃指揮官

「了解、魚雷戦用意！」

はくげい艦長

「17式長魚雷、1番2番に装填！」

魚雷戦担当士官

「17式長魚雷装填、発射管注水」

はくげい艦長

「17式魚雷、発射！」

はくげい艦首魚雷発射管から発射された17式長魚雷は敵潜水艦に真っ直ぐ向かつ

ていく……だが、はくげいが魚雷を発射したと同時にその海域に潜んでいたもう1隻の潜水艦からはくげいのソナーの死角を狙って魚雷が発射された……はくげいが発射した魚雷は敵の潜水艦に命中したが、それと同時にもう1隻が発射した魚雷もはくげいに命中、はくげいは轟沈した……

しなのCIC

ソナー員

「っ！はくげいが撃沈されました……」

艦長

「まさか、敵潜が2隻もいたのか……」

通信担当士官

「艦長！横須賀基地から通達、潜水艦への攻撃は許可しない、とのことですよ」

艦長

「は?!おいおい、現に4隻もやられてるんだぞ！それじゃあ、自衛隊から国防軍に変えた意味ないだろ！」

ソナー員

「敵潜水艦、対艦ミサイル発射！数は4！全て本艦です！」

艦長

「くっ！対空戦闘！前甲板VLS 23式中SAM1番発射用意！」

対空戦闘担当士官

「前甲板VLS23式中SAM1番発射用意よし」

艦長

「てえ！」

対空戦闘担当士官

「てえー！」

しなの前甲板VLSから対空ミサイルである23式中SAMが敵の対艦ミサイルに向けて4発発射された…

追尾担当士官

「インターセプトまで：10987654321…敵ミサイル2基撃墜、もう2基進路変わらず、真っ直ぐ突っ込んでくる！」

攻撃指揮官

「副砲、CIWS、SeeRAMで対応！」

しなのに搭載されている26式60口径127mm単装速射砲と高性能25mmバルカン砲、SeaRAM 近接防御ミサイルが向かってくる敵対艦ミサイルに対して攻撃をする…。しかし…。

追尾担当士官

「っ！速い！」

そう、敵の潜水艦が発射した対艦ミサイルは超音速で迎撃が困難なのであった…。

艦長

「っ！チャフ発射始め！」

攻撃指揮官

「間に合わない！」

艦長

「くっ！総員！衝撃に備えー！」

CICに居た全員が対ショック姿勢をとる…。それと同時に…。

ドオンー！

と、爆発する音が辺りに響き渡り、「しなの」は船体が真ん中で折れ、穴と言う穴から真つ赤な炎が溢れていた…

しなの

「…まさか、こんな形で沈むことになるとはな…」

しなの

「皆すまない…」

そう言うのと、「しなの」は深い海へと沈んでいった…

後に分かったことは、今回の攻撃が中国の潜水艦からの攻撃だったことであり、この事件後、中国政府は日本とその同盟国に対し宣戦布告、第三次世界大戦が勃発した…

今回はここまで！

第2話

しなの

「……どこだ？」

俺が目を覚ましたのはとある部屋の中だった、どうやら俺はベッドで寝ていたようだ。

しなの

「……どこ…… 何処かで見ることがあるような……」

そう言つてベッドから降り、周りを見渡すと、俺はあることに気がつく

しなの

「……、(しなの) 医務室じゃね？」

しなの

「何でこんなところに…… 俺って確か…… あの時潜水艦からの攻撃で沈んだんよな……？」

そう独り言を言っていると、医務室のいかにも重そうな鉄の扉が「ギイイイ」と音をたてながらゆっくりと開いていく……そして現れたのが……

???

「あつ！目を覚まされたんですね！しなのさん！」

「いやあく良かったらそれじゃあ早速艦橋に行きましょう！」

しなの

「…んん？」（困惑）

しなの

「あーすまないが、君はだれだ？」

???

「あ、すみません、先に自己紹介ですね！」

しなの副長妖精

「初めましてしなのさん！護衛艦しなのの副長妖精です！」ドヤア

しなの

「…ん？妖精？」

副長妖精

「はい！妖精です！」ニコニコ

しなの

「俺は…幻覚でも見ているのか…？」

副長妖精

「酷すぎませんか?!」

しなの

「いや、すまない…。ちよつと頭の整理が追い付いていなくてな…。」

副長妖精

「まあ、そうですね…。」

しなの

「まあ、何だ…。取りあえず…。宜しく頼む」

副長妖精

「はい…こちらこそ宜しくお願いします!しなのさんのサポートはお任せを!」

しなの

「頼もしいな、宜しく頼むぞ」

副長妖精

「それでは早速艦橋に行きましょう!」

しなの

「ああ、そうだな」

俺は副長妖精に連れられ艦内を歩き艦橋まで向かう。

副長妖精

「どうぞしなのさん！」

しなの

「ああ」ギィ

艦橋の入り口の前に差し掛かると俺は艦橋の扉を開け中に入る…

艦橋内の乗組員たち

「ビシッ！」

艦橋内に居た乗組員（妖精）達が一齐にしなのの方角を向き敬礼をする。それに応じるように俺も彼らに敬礼をした。

しなの

「早速だが、今の本艦の現在位置はどこだ？」

副長妖精

「わかりません」

しなの

「え？」

副長妖精

「わかりません」

しなの

「えつと… GPSは？」

???

「軌道上に衛星、確認出来ません、フリーサット衛星通信のこともです。

しなの

「えつと… 君は？」

航海長妖精

「申し遅れました！しなのの航海長妖精です！宜しくお願いします！」 m () m

しなの

「ああ、宜しく！」

しなの

「それで、GPSが使えないって言ったが…」

航海長妖精

「はい、先程も言った通りそもそも衛星が確認出来ないのです…」

しなの

「マジか…」

しなの

「レーダーとかに反応は？」

レーダー員

「特に無いですねえ……」

しなの

「詰んだ……」

すると……

レーダー員妖精

「ん？あ！しなのさん！レーダーに感！距離15マイル！感10！こちらに急速に接近
！」

しなの

「了解、無線で呼び掛けてみるか……」

しなの

『This is the Japanese Defense Navy This
is the Japanese Defense Navy』

To the Navy approaching here Please
take your fleet is currently approaching
the Japanese escort ship, your affiliation

無線機

「……」

無線機からは雑音しか聞こえない……

しなの

「次は日本語で言ってみるか」

次にしなのは日本語で所属不明の艦隊に対して無線で呼び掛ける

しなの

『本艦に接近中の艦隊へ、こちらは日本国防海軍所属護衛艦しなのである。貴艦隊は現在日本国護衛艦に接近している、貴艦隊の所属と航行目的を述べよ』

すると、無線機から少女の声が聞こえてきた……

???

『こちらは日本海軍、横須賀鎮守府第3艦隊所属、

駆逐艦時雨！本艦隊は敵の奇襲攻撃を受け、私を含む4名が中破！後方から敵艦隊接

近中！救援求む！』

その答えにしなのは少し動揺していた

しなの

「横須賀鎮守府？ 駆逐艦時雨？ 一体どうなってるんだ…？」

副長妖精

「しなのさん、どうしますか？ 救援要請がありましたか？」

しなの

「っ…」

どうする… 救援要請があつたとはいえ… 相手は日本海軍と言つた、国防海軍ではない… たが… ここで助けなければ… また… あの時の様に… それだけは… 駄目だ…！

しなのは何か決意した用な目で副長妖精をみる…

副長妖精

「しなのさん！ 御命令を！」

俺は軽く頷き…

しなの

「これより、本艦は横須賀鎮守府第3艦隊の救援に向かう！ 各部戦闘部署発動！ 対空・対潜・対水上警戒を厳となせ！」

副長妖精

「了解！」

第3話

前回の続き！

しなの

「これより、本艦は横須賀鎮守府第3艦隊の救援に向かう！各部戦闘部署発動！対空・対潜・対水上警戒を厳となせ！」

副長妖精

「了解！」

——時雨 side ——

時雨

(やられた…まさか哨戒任務中に敵の待ち伏せに会うなんて…！)

満潮

「っー」ドーン

時雨

「満潮！」

満潮

「だ、大丈夫よ… ただのかすり傷…」

時雨が率いるこの艦隊は、鎮守府近海の哨戒任務中に敵の待ち伏せを受け、全員が中破し、また弾薬なども途中で底をついたことから、彼女達は只ひたすら敵から逃げている状況であった。

叢雲

「ちよつと、ヤバいわよ！燃料がそろそろなくなるわよ！」

時雨

「え？」

時雨はふと燃料計を見る… 残りの燃料を示す針が燃料切れを示す赤色のラインまでさしかかっていた

時雨

「っ！」 ドーン

時雨のすぐ近くに敵の砲弾が着弾した、敵は徐々に追い付いてきている

時雨

（誰か… 助けて…）

その時だ、時雨の願いが叶ったのか、無線機から男の声が聞こえてきた…
???

『This is the Japanese Defense Navy This
is the Japanese Defense Navy
To the Navy approaching here Please
take your fleet is currently approaching
the Japanese escort ship, your affil-
iation and purpose of navigation.』

時雨

(英語?なんで…?)

その無線は他の艦娘たちも聞いていた

陽炎

「何この無線は?英語?」

叢雲

「敵の無線かしら?」

すると、次は無線機から日本語で男の声が聞こえてきた

???

『本艦に接近中の艦隊へ、こちらは日本国防海軍所属護衛艦なのである。貴艦隊は現在日本国護衛艦に接近している、貴艦隊の所属と航行目的を述べよ』

時雨

(日本国?国防海軍?護衛艦なの?どう言うこと...?)

陽炎

「今日本って言った?」

叢雲

「けど国防海軍って、うちは日本海軍だし、それに護衛艦なのって何よ?聞いたこと無いわよそんな艦種」

満潮

「敵の畏かしら?」

時雨

(確かに...敵の畏の可能性も無いとは言えない...けど...もし敵では無かったとしたら...助けてくれるかも知れない...!)

時雨は無線のスイッチを押し...

時雨

『こちらは日本海軍、横須賀鎮守府第3艦隊所属、

駆逐艦時雨！本艦隊は敵の奇襲攻撃を受け、私を含む4名が中破！後方から敵艦隊接近中！救援求む！』

満潮

「ちよつ、時雨！何して…。」

叢雲

「そうよ！敵の罠かも知れないのよ！」

時雨

「大丈夫」

時雨はそう一言言い静かに相手の返事を待った…

ーしなのsideー

しなの

『横須賀鎮守府第3艦隊へ、こちら護衛艦しなの、そちらからの救援要請を確認した、これより敵艦隊に対して攻撃を行う、出来るだけ敵から離れていてくれ』

時雨

『こちら横須賀鎮守府第3艦隊、了解』

しなの

「よし：： しなのより総員に達する、対空、対水上戦闘よろしく！」

しなの

「副長妖精、俺はC I Cに向かう、艦橋での指揮は任せたぞ！」

副長妖精

「了解しました！任せてください！」

——しなのC I C——

しなの

「敵艦の数と、艦種は？」

追尾担当士官妖精

「敵艦の数は6、艦種は空母1戦艦1重巡2軽巡2です、また敵空母の艦載機多数！」

しなの

「了解した、まずは敵の航空機から片付ける！対空戦闘！」

攻撃指揮官妖精

「了解！対空戦闘！」

しなの

「前甲板VLS23式中SAM、1番から12番！発射よ！目標アルファA1〜A10！」

対空戦担当士官

「了解！前甲板VLS23式中SAM1番から12番発射用意！目標A1〜A10！」

ミサイル担当士官

「目標データ入力完了！発射用意よし！」

しなの

「てえー！」

ミサイル担当士官

「Missile launch！」

バシユーン！

しなの前甲板VLSから合計48発の23式中SAMが発射され、敵空母の艦載機に向かつていく

ミサイル担当士官学校

「23式中SAMインターセプトまで…5！4！3！2！1！…」

マークインターセプト！A1〜A10の撃墜を確認！」

しなの

「了解、最後に敵艦を片付ける！水上戦闘！後部SSM

25式艦対艦誘導弾1番から6番！発射よ〜い〜！目標！フォックスロットF2-1からF2-6！」

水上戦闘担当士官妖精

「了解、後部SSM、25式艦対艦誘導弾1番から6番！発射よ〜い〜！目標F2-1からF2-6！」

ミサイル担当士官妖精

「後部SSM、25式艦対艦誘導弾1番から6番発射用意よし！」

しなの

「てえー！」

ミサイル担当士官妖精

「Missile launch！」

しなのに搭載されている25式艦対艦誘導弾4連装発射筒

から6発の対艦ミサイルが発射され、それぞれ敵艦に向かっていく…

ミサイル担当士官妖精

「25式艦対艦誘導弾、目標到達まで… 5！4！3！2！1！」

目標：： ターゲットキル！」

追尾担当士官妖精

「レーダー上に敵影なし」

しなの

「よし：： 対空、対水上戦闘用具収め」

攻撃指揮官用具

「対空、対水上戦闘用具収めよし」

しなの

「ふう：： 皆よくやってくれた」

しなの

「だが、まだ気を抜くなよ、引き続き対空、対潜、対水上警戒を厳とせよ！」

攻撃指揮官妖精

「了解！」

そしてしなのは横須賀鎮守府第3艦隊旗時雨に被害状況の確認のため無線を行うしなの

『こちら護衛艦しなの、横須賀鎮守府第3艦隊旗時雨へ、敵艦隊の撃破を確認した、そ

こちらの被害状況は?』

時雨

『こちら横須賀鎮守府第3艦隊旗艦時雨、まず救援感謝します。こちらの被害状況は全員が中破している状態で、また、燃料もほとんどありません』

しなの

『了解した、これより横須賀鎮守府第3艦隊の救助に向かうが、よろしいか?』

時雨

『はい、お願いします』

しなの

『了解、数分でそちらと合流する』

時雨

『了解』

しなの

『これより本艦は横須賀鎮守府第3艦隊の救助に向かう!取り舵いっぱい!最大戦速!』

副長妖精

『了解!取り舵いっぱい!最大戦速!』

護衛艦しなのは救助の為、最大戦速で時雨達がいる方向に向かった…

—時雨 side—

しなの

『横須賀鎮守府第3艦隊へ、こちら護衛艦しなの、そちらからの救援要請を確認した、これより敵艦隊に対して攻撃を行う、出来るだけ敵から離れていてくれ』

時雨

(！来た！)

時雨

『こちら横須賀鎮守府第3艦隊、了解』

陽炎

「攻撃するっていつでも…」

叢雲

「てか、まず電探にすら映ってないんだけど… その… 護衛艦しなの？ だっけ？」

満潮

「ヤッパリ罨なんじゃ…！」

その時！

陽炎

「あ！時雨！敵機！」

時雨

「え？」

時雨に向かつてくる敵機……その敵機の翼下には黒光りする二つの爆弾があった……

満潮

「時雨！」

時雨

「あ……」

時雨に爆弾が落とされる直前……！

ドオンと大きな爆音と共に敵機が爆発し、その残骸が海に落ちていく……

満潮

「え……」

陽炎

「何が……」

時雨

「……！あれは……！」

時雨か見たものとは、矢のように細く、後ろからは炎を吐きだし、もの凄い速さで空を飛翔する物体だった…。そして、それは一つではなく無数の物が敵の航空機を次々と撃墜していく…。

満潮

「なに…これ…」

陽炎

「分らないけど…取りあえず…凄い」

そして、撃破されるのは航空機だけではなく、敵艦も次々に撃沈されていく…
叢雲

「本当に何が…」

時雨

「…スゴい…」

目の前の出来事に圧倒されていると、しなのからの無線がはいる

しなの

『こちら護衛艦しなの、横須賀鎮守府第3艦隊旗艦時雨へ、敵艦隊の撃破を確認した、そちらの被害状況は?』

時雨

『こちら横須賀鎮守府第3艦隊旗艦時雨、まず救援感謝します。こちらの被害状況は全員が中破している状態で、また、燃料もほとんどありません』

しなの

『了解した、これより横須賀鎮守府第3艦隊の救助に向かうが、よろしいか？』
その問いに…

時雨

「皆どうする?」

叢雲

「良いんじゃない?自力で鎮守府に帰ろうにも、燃料も無いし、それに助けてくれるって
いってるんだし、断わる理由も無いわ」

陽炎

「それもそうね」

満潮

「私も賛成よ」

時雨

「分かった」

時雨

『はい、お願いします』

しなの

『了解、数分でそちらに合流する』

時雨

『了解』

そして無線は切れる

満潮

「なんて？」

時雨

「救助に来てくれるって」

満潮

「そう…」

陽炎

「それにしても、何だったのかしら…あの攻撃は…」

叢雲

「そうね、砲撃…とは違ったわよね…？」

陽炎

「案外未来の兵器だったりして」

満潮

「いくらなんでもそれは無いでしょ……」

すると、電探にこちらに向かう反応を見つけた

叢雲

「ん？電探に反応が……」

時雨

「どうやら来たみたいだね」

陽炎

「この距離で探知って……電探の調子が悪いのかしら？」

そして、時雨達が見たのは……

「「「え……？」」」」

……船体が所々角ばり、変わった形をした巨大な軍艦だった……

第4話

前回の続きー！

叢雲

「ん？電探に反応が…」

時雨

「どうやら来たみたいだね」

陽炎

「この距離で探知って…電探の調子が悪いのかしら？」

そして、時雨達が見たのは…

「「え…？」」

船体が所々角ばり、変わった形をした巨大な軍艦だった…

満潮

「え、ちよつ…何…これ…」

陽炎

「デカイわね…」

するとその巨大な軍艦の甲板に人影が現れた

叢雲

「あら？甲板に誰が出てきたわよ？」

時雨

「あの人がしなのさんかな？」

そしてしなのは甲板からはしごを投げる

陽炎

「登ってこいって事かしら？」

満潮

「それ以外ないんじゃない？」

満潮はそう言い一番乗りではしごを登り始めた、それに続けて陽炎が登り叢雲、時雨の順ではしごを登って行く。そして甲板には時雨達を待っていたかのようにしなのが立っていた。

しなの

「さてと、これで全員かな？」

時雨

「うん、そうだよ」

しなの

「そうか、それじゃあ改めてまして、日本国防海軍第6護衛隊群第6護衛隊所属のしなの型ミサイル護衛艦1番艦のしなのだ宜しく」

時雨

「僕は白露型駆逐艦2番艦の時雨だよ、宜しく」

叢雲

「特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ、宜しく」

陽炎

「陽炎型駆逐艦、ネームシップの陽炎よ、宜しくね」

満潮

「駆逐艦、満潮よ、宜しく」

しなの

「宜しく」

陽炎

「それで、いきなりだけど、えっと…しなの？だっけ？」

しなの

「ん？、どうした？陽炎… だったかな？」

陽炎

「ええ、その… あの時私たちを助けてくれたのってしなのだよね…？」

しなの

「？ああ、そうだが…？何か気になることでも？」

陽炎

「いや、あんな攻撃見たことないから…」

しなの

「え？これがスタンダードな攻撃方法じゃないのか？」

叢雲

「いやいやいや、それは無いと思うわよ…」

満潮

「て言うか貴方もしかして性別男？」

しなの

「そうだが…？」

時雨

「へえーやっぱり男の人だったんだね」

陽炎

「男の艦娘何て始めて見たわ」

しなの

「それより、君たちはこれからどうするんだ？」

時雨

「あ、えっと……取りあえず横須賀に帰ろうかなって思ってるけど……」

しなの

「けど？」

時雨

「皆の主機が壊れちゃっているから……帰ろうにも帰れないんだよ……」

しなの

「なら横須賀まで送ろうか？まあ、入港の許可が貰えればの話だが……」

時雨

「本当?!」

しなの

「あ、ああ……元からそのつもりでもあったしな」

時雨

「分かった、ちょっと提督に聞いてみるよ、無線だけ貸して貰えるかな？ 戦闘中に壊れちゃったみたいだね」

しなの

「あーわかったけど、C I Cに行かないと長距離通信が出来る無線が無いからな… っ
いてきてくれるか？」

時雨

「分かったよ」

陽炎

「しーあいしー？」

しなの

「C o m b a t I n f o r m a t i o n C e n t e r の略だよ」

陽炎

「へ、へえー」↑分かってない

そんな会話をしながら、しなのは時雨達を連れ、艦の心臓部でもあるC I Cに向かっていく。その途中で副長妖精に出会った。

副長妖精

「あ、しなのさん！ お疲れ様です、何処に行くんですか？」

しなの

「あ、副長妖精か、ちよつと彼女達が無線を使いたって言ってな、C I Cに向かつている所だ」

副長妖精

「え、C I Cにですか…」

しなの

「あー分かつてる本来は関係者以外立入禁止だもんな、抵抗感があるのは分かるが、まあ無線使うだけだし、大丈夫だろ」

副長妖精

「あ、いや…そうじゃなくて…」

しなの

「ん？」

副長妖精

「何でも無いです…」

しなの

「そうか…？」

そう言っている内にC I Cに到着した

叢雲

「何か重々しい雰囲気ね…」

満潮

「そうね…ん…？何か中が騒がしいけど…？」

しなの

「そうだな…何やってんだ全く…俺だ、入るぞー」ガチャ ギイー

そう言う中から「ヤベ」とか「ハヤクカクセ」と何やら聞こえてくる

そしてしなのが入ると、同時にC I Cに居た妖精さん達が無言のまま隠れたように見えた

しなの

「ん？お前ら何か隠したか？」

C I Cに居る妖精さん達

「「「「いえ、なにも」」」」

しなの

「？そうか？」

しなの

「あ、無線借りるぞー」

C I Cに居る妖精さん達

「「「「「どうぞどうぞ」」」」」

しなの

「何てな！」ガシッ！

俺は近くに居た妖精さんの1人から手に持っているものを掴んだ、すると…

しなの

「は？トランプ？」

C I Cに居る妖精さん達

「「「「「」」」」」 ダラダラダラダラ

しなの

「オッホン、誰か説明してくれ」

砲雷長妖精

「えっと… トランプをしてて…」

しなの

「それは分かってる、何でこんなことしているかって事だ」

C I C 妖精

「えっと… 夕飯のデザートを賭けて… トランプしてました…」

しなの

「ふむ… 1つ言わせろ… 何で今?!」

しなの

「お前らそれでも幹部かよ?!」

副長妖精

「しなのさん!」

しなの

「あん?」

副長妖精

「生理現象には勝てないです!」

しなの

「いや開き直るなよ…」（呆れ）

しなの

「欲に忠実なのは結構だが、時と場合を考えろ、良いな?」

C I C に居る妖精さん達

「「「「「ハイ…」」」」」」

しなの

「良いな?!」

C I Cに居る妖精さん達

「「「「「は、はいい!」「「「「」」

しなの

「ふう、あ、悪かった、変なところを見せてしまったな」

時雨

「あ、う、うん大丈夫だよ…」

叢雲

「あんたのところの妖精さんって結構変わった子達が多いのね…」

しなの

「戦闘中はあんなに真面目だったのに…」

時雨

「えつと…無線は…」

しなの

「あ、ああ、これだ」

俺はそう言い時雨に無線を渡した

時雨

「ありがとう」

時雨は馴れた手つきで無線を操作し周波数を合わせる。

時雨

『こちら駆逐艦時雨、提督聞こえるかい?』

と時雨は無線で問いかける。そして時雨は横須賀の提督と思われる人物と話を始めた。

時雨

『うん、大丈夫だよ、提督は心配性だね、途中でとある艦娘に助けてもらったんだよ。それでね僕達の主機が深海棲艦との戦闘で壊れちゃったからって事で、鎮守府まで送ってくれるって言うてくれてるんだけど、入港しても大丈夫かな? うん、本当? 分かったよ、ありがとう』

時雨はそつと無線機を置きこちらを向く

叢雲

「どうだった?」

時雨

「大丈夫だって、提督がその艦娘を歓迎するって言うてたよ」

しなの

「そうか、良かった…。それじゃあ横須賀に向かおうか」
しなの

「航海長妖精！進路を横須賀に頼む」

航海長妖精

「了解…！」

——とある海域で——

そこはまさに地獄のようだった。

青色の海が炎で真っ赤に染まり。

もはや原型の無いただの鉄屑と化した船。

パニックで逃げようにも逃げられない船員達。

近くには護衛のために随伴していた艦娘達が艀装から真っ赤な炎と黒煙を上げ、艦娘

達は苦悶の表情をしている。

そして周りには何処から攻撃されたか分からずパニックになっている艦娘も複数居る。

そして攻撃をした人物は、その現場から少し離れた場所に居た。

???

「ドコニ…：イルノヨ…：ドコニ…：」

彼女は誰かを探しているようだった。

彼女は悔しそうな顔をしていた。

だが、彼女は何処か悲しそうな顔をしていた。

そして最後に彼女はこう言った…

???

「ドコニ…：イルノ…：『シナノ』…：」